

石崎川流域の首長墓系譜について

和田 理啓

(宮崎県埋蔵文化財センター)

1 はじめに

2020年、宮崎県埋蔵文化財センターでは7か年にわたって行われた「宮崎の古墳保護・活用事業」の成果がまとめられ報告された（宮崎県埋蔵文化財センター 2020）。その報告の中で、県指定広瀬村45号墳の測量成果や、県下の古墳一覧表に旧佐土原町（現在、合併されて宮崎市となっている。）のものも掲載され、未だ不十分とはいえ、当埋蔵文化財センター周辺の古墳を有機的に検討することが可能な状況になりつつある。

そこで、本稿では、これまであまり顧みられることのなかった一ツ瀬川南岸の下流域から大淀川の下流域、特に石崎川の流域を中心にその首長墓の在り方を検討し、古墳時代における位置づけを検討したい。

2 「石崎川流域」とは

石崎川は、宮崎平野のほぼ中央を蛇行しながら東進する小河川で、北に一ツ瀬川、南に大淀川という大河川に挟まれ形成されている沖積地の北側を流れ日向灘にそそぐ。ここでいう石崎川流域は、この石崎川の両岸から一ツ瀬川の南岸を南北の境とし、東西は日向灘に面する砂丘列から九州山地から東に延びる丘陵地下までの間に形成された沖積地をいうこととする（第1図）。



図1 石崎川流域

3 石崎川流域の古墳群に関する先行研究

この地域の古墳については、古くは、大正年間に下田島（一ツ瀬川南岸）で採集された遺物が収蔵されたことが東京国立博物館にの記録にみえる（本村豪章 1981 p46）。

日向地誌には、現県指定広瀬村 45 号墳に吾平山稜の伝説が残ることが記されている（平部嶠南 1927 p199）。また昭和 14（1939）年には、「広瀬村古墳」として 80 基（前方後円墳 2 基、円墳 23 基、横穴墓 55 基）が県指定史跡となっている。

しかし、いくつかの行政による発掘調査事例を除けば、学術的な検討がなされぬまま、主に戦後の開発により破壊が進行し、昭和 60（1985）年には前方後円墳 1 基、円墳 8 基、横穴墓 4 基が指定解除されている（宮崎県 2020 p96、荻田 2004a p39）。

このように宮崎平野南部では有力な古墳群を形成していた地域であり県内でも有数の横穴墓集中地であるにもかかわらず、20 世紀においては有機的な研究に発展することはなかった。

21 世紀に入り岩谷徹や荻田益弘など、在野の考古愛好家により踏査や墳丘測量などが行われ、前方後円墳が新たに発見されるなど新知見が提示され、次第にこの地域の古墳の情報が明らかになってくる（岩谷 2004、荻田 2004a, b）。

特に、岩谷や荻田の成果は、その検討内容や方法に、にわかには首肯しがたい部分もあるとはいえ、つぶさな踏査と文献の調査、詳細な墳丘測量図の提示などにより、初めて、この地域の古

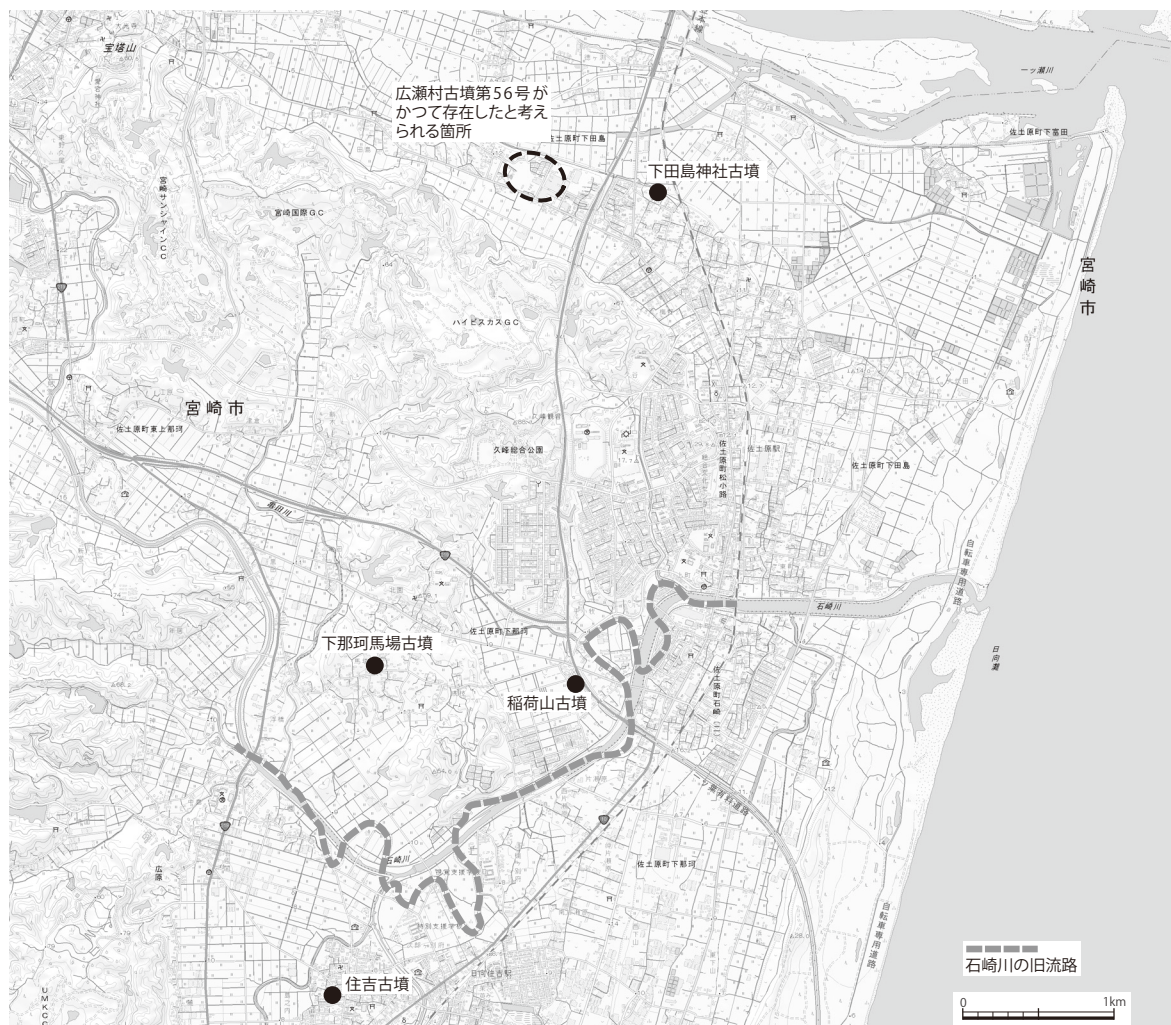


図2 石崎川流域の前方後円墳 (S=1:50,000)

墳群を有機的に評価したものだと言っていい⁽¹⁾ だろう。

4 石崎川流域の前方後円墳の検討

現状で、石崎川流域には県指定住吉村古墳第1号（以下、住吉古墳）、県指定広瀬村古墳第51号（円墳指定、以下、下田島神社古墳）、岩谷によって発見された下那珂馬場古墳の3基の前方後円墳が知られる。さらに現在の外観では円墳であるが、前方後円墳として指定されている県指定広瀬村古墳第45号（以下、稲荷山古墳）を加えると、4基の前方後円墳が存在することになる。

また、かつて下田島天神地区に70m級の前方後円墳（広瀬村古墳第56号）が存在したというが、昭和30年代に工場建設のため完全に破壊されており（岩谷2004 p34 1.7-8）、詳細が不明⁽²⁾なため今回は検討の俎上にあげない。

以下、ここにあげた4基の前方後円墳の検討を行い、その築造時期を推定する。

（1）下田島神社古墳（県指定広瀬村古墳第51号）

下田島神社古墳は、日向有数の大河川である一ツ瀬川の河口近くの南岸に形成された河岸段丘上に築造された古墳である。

墳丘は北側を旧国鉄妻線、南側を下田島神社の社殿によって大きく削平されている。妻線は大正3（1914）年に宮崎県営鉄道として開通しているので、墳丘北側の削平はそれ以前に行われたことになる。下田島神社は文明年間に現在の位置に建てられたとのことであり、墳丘南側の削平はその頃に遡るかもしれない。境内は現在公園化されており、遊具の設置などがされている。

なお、墳丘は昭和14（1939）年に円墳として県指定となり現在に至っている。

現地を確認すると比高差2.5mほどの墳丘の東側に、比高差1.5mほどの低い高まりがのびているのが分かる。荻田はこれを前方部と疑い、墳丘を測量するに至ったわけである。ここでは荻田の測量図（荻田2004a）をデジタルで再トレースしたものを掲載する（図3）。荻田は自らの測量成果から、墳丘が纏向類型であると考えているが、前方部やスロープ部分から前方部墳頂にかけての等高線を見ると、それを想定するのは難しいだろう。しかし、比較的残りのよい前方部の形状、後円部墳頂と前方部墳頂の標高差などから、前期古墳である可能性は非常に高いと考えられる。また、荻田は測量時に葺石を確認しており、現在のところ日向では後期以降の古墳に葺石が施された例は確認できないので、中期以前の古墳であることもほぼ確実である。

以上を踏まえ、主に集成編年3～4期に比定されている古墳と墳形の比較を行った。下田島神社古墳は破壊の破壊の程度が大きいこともあり、明確な比較は困難であるが、比較的形状が保存されていると考えられる前方部、等高線から想定できる後円部の基底部を参考にした。

その結果、渋谷向山古墳の前方部2段目基底部から後円部3段目基底部に繋がる形状におおよそ合致しそうであることがわかった。このほか、行燈山古墳や西都原100号、173号などの古墳とも比較を行ったが、現状からは渋谷向山古墳は最もよく整合した。

下田島神社古墳の後円部は大きく破壊されており、埋葬施設が破壊され副葬品の出土があった可能性は大きい、そのような記録は残っておらず、いささか乱暴ではあるが、以上の結果から、4期の前方後円墳と考えておきたい。復元される規模は、墳長45m前後で、石崎川流域では、現存で最古の前方後円墳である。

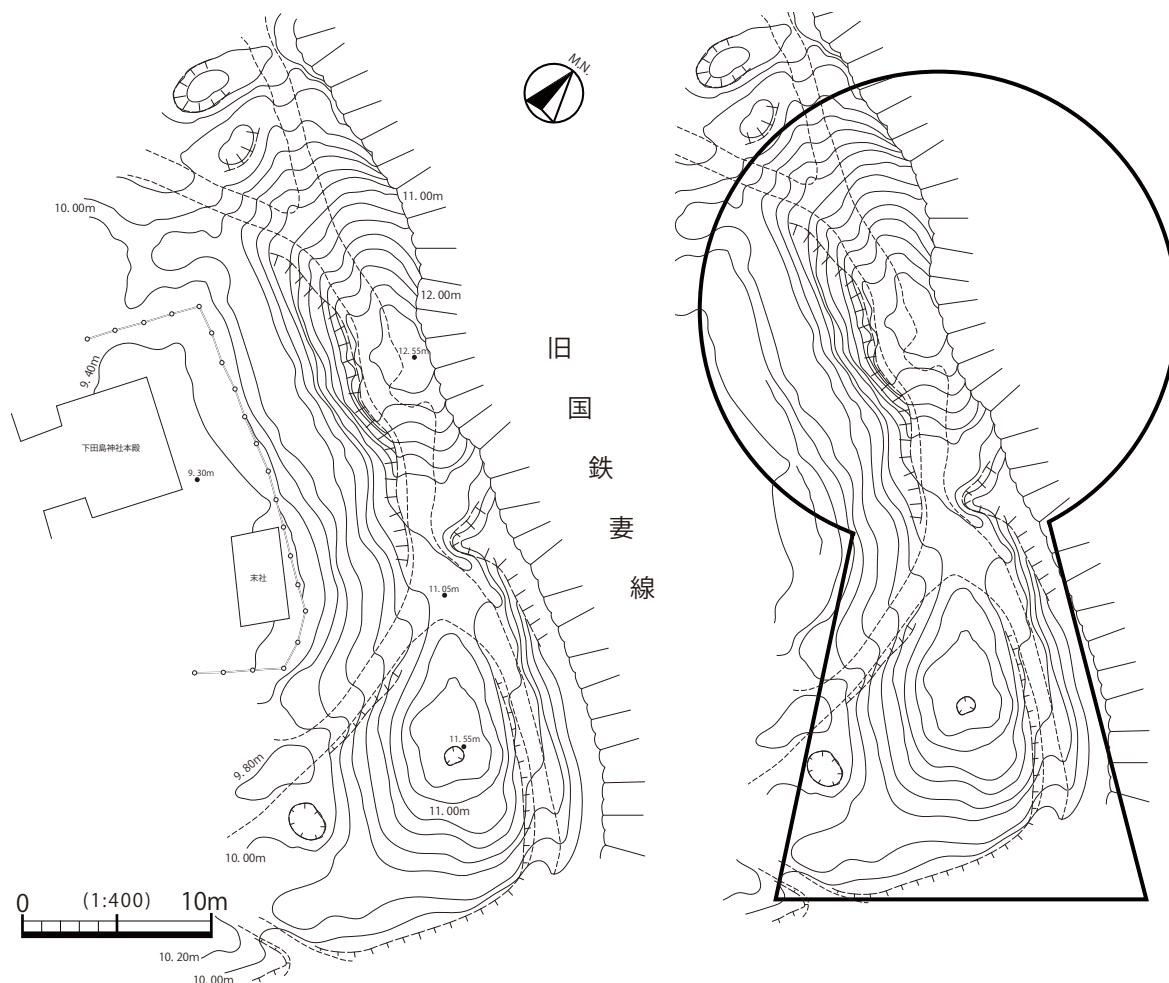


図3 下田島神社古墳墳丘測量図(左・萩田 2004a から抜粋、再トレース)と墳丘復元想定図(右)

(2) 稲荷山古墳(県指定広瀬村古墳第45号)

稲荷山古墳は、石崎川が下流で大きく蛇行する流路に囲まれた沖積地に立地する。前述したように吾平山稜としての伝承が残り、陵墓参考地の候補にあがったこともあるという。昭和27(1952)年の報告では「柄鏡式」との記述が見え(瀬之口 1952)、県指定の種別も「前方後円墳」となっているが、現在、前方部は確認できない。

墳丘は2018年から2019年にかけて、宮崎県埋蔵文化財センターにより墳丘測量、地中レーダー探査、周溝の確認調査などが行われている。それによると、径37mの円墳、もしくは造出付円墳で築造時期は中期後半とされている(宮崎県埋蔵文化財センター 2020 p98-100)。

宮崎県埋蔵文化財センターでは、「円墳、もしくは造出付円墳」との判断であるが、昭和27年報告で「柄鏡式」との表記があること、大正年間には吾平山稜として陵墓参考地の候補にあがったこと、指定が前方後円墳であったこと、レーダー探査では周溝が社殿側には巡らない可能性が高かった⁽³⁾こと、測量図の周溝の等高線から、いわゆる九州南部型(橋本 2012)になる可能性が高いと判断できることなどから、ここでは前方部を削平された前方後円墳と判断した。

前方後円墳とした場合、前述のように「柄鏡式」との記載があることから、いわゆる柄鏡類型(柳沢 1995)であったと予想できる。また、後円部の遺存状況が非常に良好であるのに対し、前方部が全く確認できないほど削平されていることから、もともと前方部は非常に低平であったと考えられる。恐らく参道として利用されるうち、前方部であるという認識自体が失われていった

のだろう。以上のことから、稲荷山古墳は柄鏡類型の中でも最も新しい柄鏡c類型（柳沢 1995）と判断する。そこで、柄鏡c類型として最大の鹿児島県唐仁大塚古墳の墳丘と比較すると、周溝まで含めた円丘部の平面企画が非常によく一致する（図4）。前方部が全く確認できていない現状ではやや乱暴な想定になるが、唐仁大塚の橋本達也（2006）による復元想定図⁽⁴⁾と同じ企画と考えた場合、墳長は70mほどになる。時期については、唐仁大塚古墳と同時期、集成編年で、4期末ぐらいの時期と判断したい。

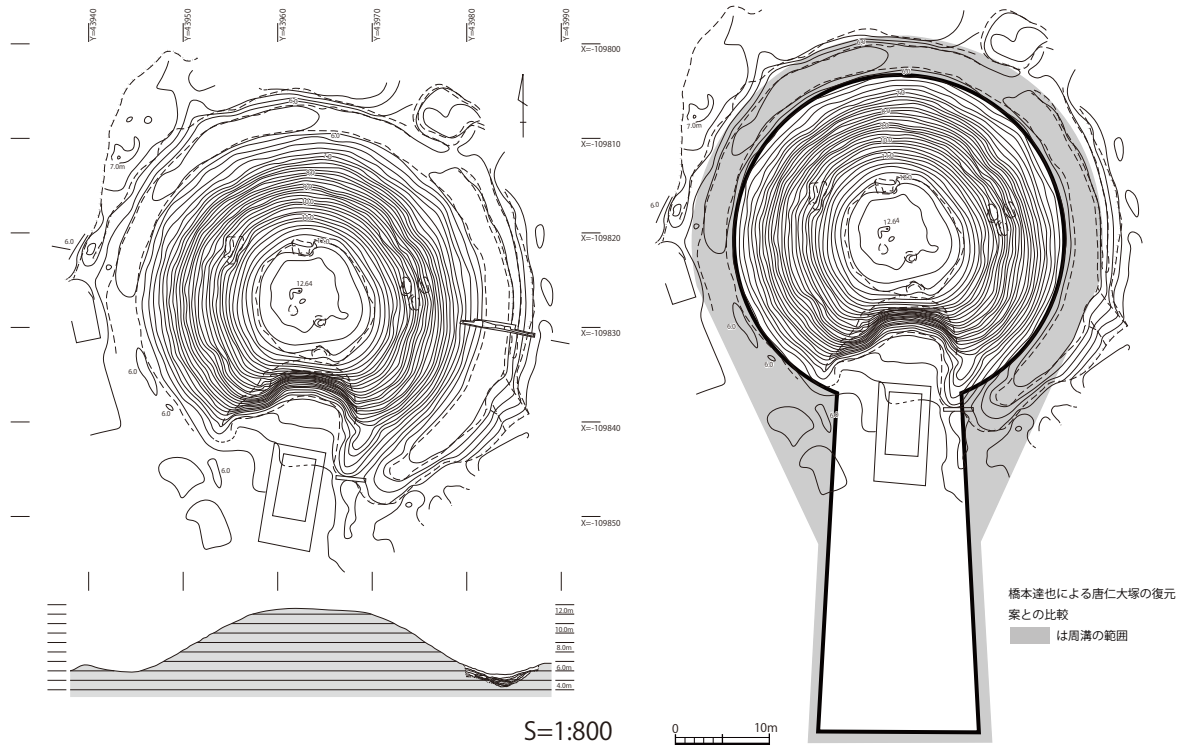


図4 稲荷山古墳墳丘測量図（左・宮崎県埋蔵文化財センター 2020 から抜粋）と唐仁大塚古墳との比較（右）

（3）住吉古墳（県指定住吉村古墳第1号）

住吉古墳は、石崎川が複雑に蛇行しながら東進する南岸の砂堆上に位置する。全長67mの前方後円墳で、墳丘はくびれ部から私道により分断されており、後円部墳頂には白山信仰の社が建立されている。墳丘裾部も削平を受けている。墳丘からは川西Ⅲ期の埴輪が表採されており、古墳時代中期前半代の築造が予想されている。編年の根拠が脆弱ではあるが、ここでは集成編年5期に位置付けた。

（4）下那珂馬場古墳

下那珂馬場古墳は、21世紀になり岩谷徹によって発見された前方後円墳である。現在墳丘は周辺の建物等によって大きく破壊され、後円部の墳頂には社殿が建っている。墳丘上からは円筒埴

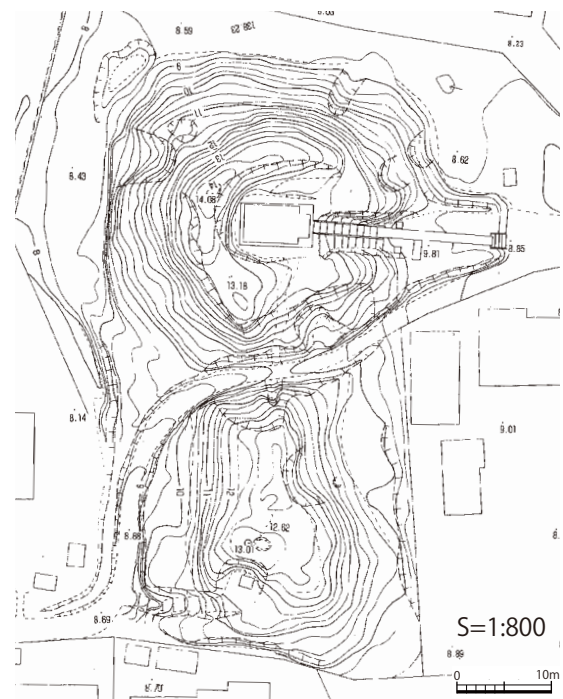


図5 住吉古墳墳丘測量図（宮崎県 1997 から抜粋）

輪が採集されており、後円部墳頂の社殿によって破壊された埋葬施設からのものと考えられる短甲片、鉄剣片、鉄斧などの鉄器が報告されている（有馬 2000、有馬・柳沢 2000、加藤・和田 2010）。復元される墳長は 75 ～ 80 m 程度で、現在確認できる石崎川流域の前方後円墳では最大の規模を誇る。編年的根拠は弱いが、表採された鉄製品や川西Ⅳ期（川西宏幸 1988）に相当すると考えられる埴輪から、古墳時代中期後半、集成編年 7 期末から 8 期初頭に位置づけた。

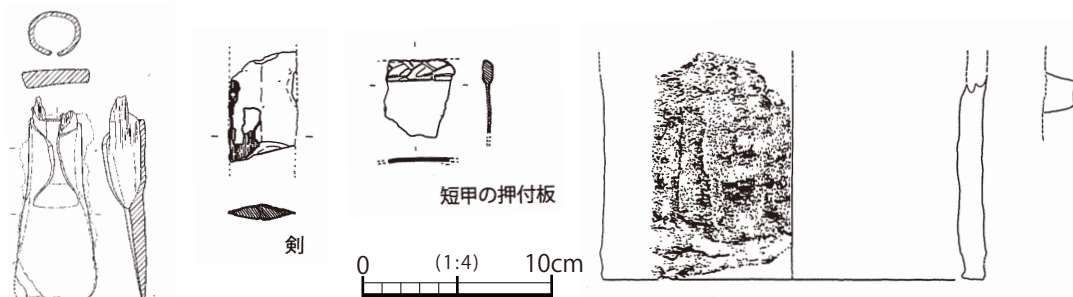


図6 下那珂馬場古墳の表採遺物（加藤・和田 2010 より転載）

5 石崎川流域の首長墓系譜

（1）石崎川流域の首長墓系列

石崎川流域の前方後円墳の分布を確認すると、一ツ瀬川河口南岸の段丘上に位置する下田島の一群、石崎川北岸、久峰の丘陵と下那珂の丘陵の間に形成された沖積地を中心に分布する下那珂の一群、石崎川の南岸の砂堆上に分布する住吉の一群の 3 系列ほどが現状で確認できる。これらのそれぞれの系列上で、40 ～ 80 m 規模の前方後円墳が断続的に築かれていたと考えられる。

（2）生目、下北方古墳群との比較

石崎川も含める大淀川下流域で、古墳時代の盟主的な位置を占めると考えられる生目、下北方の両古墳群の首長墓系譜と、石崎川流域の首長墓系譜を比較するため、図 7 を作成した。

前節での検討の結果、4 期前半に下田島神社古墳、4 期後半に稲荷山古墳、5 期に住吉古墳、7 期末に下那珂馬場古墳を位置付ける。生目、下北方の首長墓系譜については、竹中克繁らの見解（竹中ほか 2012、西嶋剛広・竹中 2019）に従った。

その結果、石崎川流域では生目古墳

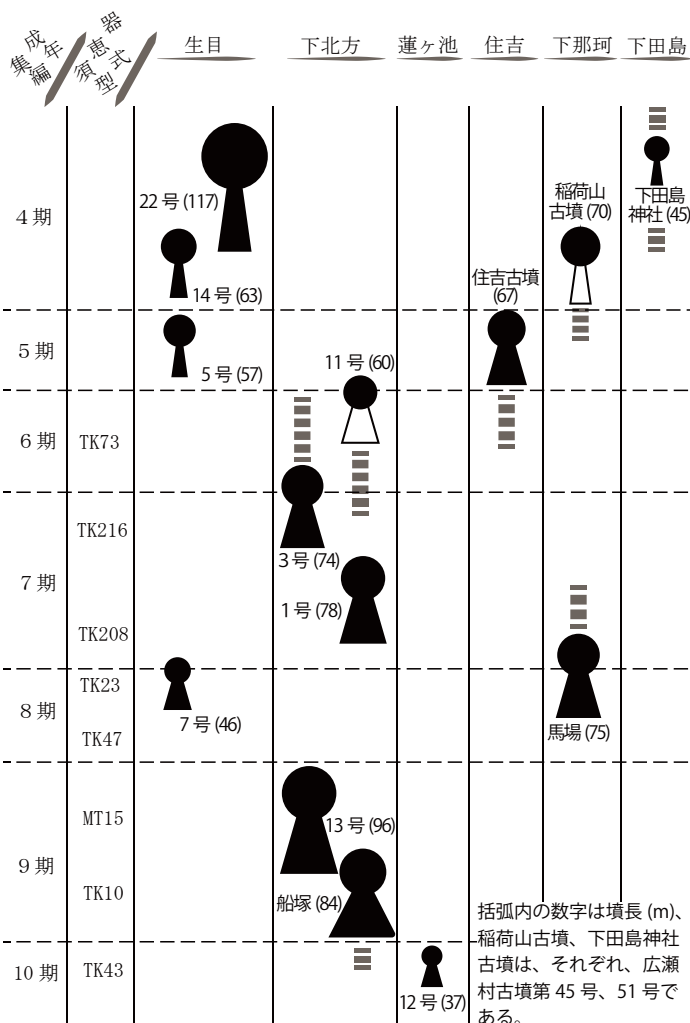


図7 大淀川下流域～一ツ瀬川流域南岸の首長墓系譜

群で100m規模を超える最後の前方後円墳が作られる時期に首長墓系譜の形成が始まり、生目古墳群がその墳丘規模を縮小し、下北方古墳群が形成されると並行し、宮崎南部平野部で最大規模の前方後円墳を築造していることが確認できた。

中期以降、下北方で前方後円墳が築造されると同時期のものは石崎川流域では確認されないが、生目古墳群で前方後円墳が築造されると、その規模を凌駕するものが石崎川流域で現れているのには特に注目される。

6 まとめ ～大淀川という境界～

前述したとおり、石崎川流域の首長墓系譜を生目古墳群、下北方古墳群の首長墓系譜と比較した場合、生目系譜の縮小を機に形成が始まり、下北方古墳群の系譜を補完するように前方後円墳が築かれている様にみえる。また、生目古墳群で前方後円墳の築造が一時途絶えたあと7号墳が築かれた時期に下北方古墳群では前方後円墳の築造が停止するが、それを補完するかのように石崎川流域で宮崎平野南部で最大の前方後円墳、下那珂馬場古墳が築かれる。下那珂馬場古墳は墳丘規模だけでなく、埴輪の採用、甲冑の副葬、また、表採遺物から豊富な鉄製品が副葬されていることが予想されるなど、南部平野部の盟主墳と評価しうるものであると考えられる。対して、生目7号墳は墳丘規模こそ50mに達しない程度のものであるが、周溝内祭祀に伴う供献須恵器などを見ると、同時期に宮崎平野海岸部の砂丘上で開始する牧の経営（宮崎県埋蔵文化財センター2013）に伴う半島系の技術導入に主導的な役割を果たした可能性が考えられる。このような状況からは、前期より続く伝統的な生目の勢力を、中期においては大淀川を境界としたその北岸の勢力が牽制し続けていたことがうかがえる。

古墳時代中期において生目勢力は、衰えたとはいえ、伝統的な影響力を大きく残していたため、半島をはじめとする対外交渉において無視できない存在感を維持していたのではないだろうか。特に、中期後半における宮崎平野部への半島系の技術導入では、生目7号墳の築造に現れるように、非常に重要な役割を担っていたと推察できる。そのため、大淀川を挟んで指呼の距離で対峙する下北方の勢力が中心となって生目勢力の牽制をしながらも、時々に応じ大淀川北岸の首長層が連携し、牽制の強弱のバランスをとっていたのだろう。その表出が、石崎川流域に見られる古墳時代中期における宮崎平野南部最大級の前方後円墳の系譜であるにとらえたい。

註

- (1) 岩谷の下那珂馬場古墳の発見、荻田の広瀬村51号墳の墳丘測量図の提示などは、この地域の古墳時代を検討する上で非常に大きな成果である。これらの成果を、考古学の専門教育を受けていない在野の存在であることから、公表から15年以上も検討の俎上に乗せていない筆者を含む当県の考古学研究の姿勢は批判されてしかるべきであろう。
- (2) 国土地理院がウェブサイトで公開している昭和30年代以前に撮影された航空写真等も確認したが、それらしき地形の盛り上がりや林などが確認できるが、古墳であるという確証は得られなかった。
- (3) レーダー探査を行った、当センター職員、東憲章氏の御教示による。
- (4) 唐仁大塚の橋本による復元案には、特に前方部の長さについて懐疑的な意見も多いが、ここでは公表されている見解に従った。

参考・引用文献

報告書・資料集等

宮崎県 1927 「稲荷神社と傳説吾平山稜」『宮崎縣史蹟調査』第一輯

宮崎県 1997 『宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成』

宮崎県埋蔵文化財センター 2013 『山崎上ノ原第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第224集

宮崎県埋蔵文化財センター 2020 『みやざきの古墳保護・活用事業』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第235集

宮崎市教育委員会 2003 『史蹟 生目古墳群 保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅳ』宮崎市文化財調査報告書 第54集

宮崎市教育委員会 2006 『史蹟 生目古墳群 保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅴ』宮崎市文化財調査報告書 第61集

宮崎市教育委員会 2019 『中小路遺跡一宅地造成に伴う埋蔵部家財発掘調査報告書一』宮崎市文化財調査報告書 第127集

宮崎市教育委員会 2020 『下北方5号地下式横穴墓』宮崎市文化財調査報告書 第128集

大阪府立近つ飛鳥博物館 2012 『大阪府立近つ飛鳥博物館 平成24年度 秋季特別展 南九州とヤマト王権』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 58

論文等

有馬義人 2000 「宮崎県の埴輪—その導入と展開—」『九州の埴輪 その変遷と地域性—壺形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾—』第3回九州前方後円墳研究会

有馬義人・柳沢一男 2000 「下那珂馬場古墳」『前方後円墳集成』補遺編

岩谷 徹 2004 「佐土原町の古墳群についての私見」『考古研究』第1号

荻田益弘 2004a 「広瀬村 第51号墳—前方後円墳の可能性について—」『考古研究』第1号

荻田益弘 2004b 「広瀬村古墳 第1・2号墳」『考古研究』第1号

加藤徹・和田理啓 2010 「下那珂馬場古墳表採の有袋鉄斧」『宮崎考古』第22号

川西宏幸 1988 「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』

瀬之口傳九郎 1952 「日向古墳地名表」『日向遺跡調査報告』第一輯 宮崎県教育委員会

竹中克繁・西嶋剛広・瀧内美智子 2012 「下北方11号墳南隣接地表採遺物の検討—編年的位置付けと首長墓系譜—」『宮崎考古』第23号

都出比呂氏 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢／史学篇』第22号

西嶋剛広・竹中克繁 2019 「下北方古墳群首長墓系譜の再検討—船塚遺跡出土埴輪の検討から—」『宮崎考古』第29号

橋本達也 2006 「唐仁大塚古墳考」『鹿児島考古』第40号

橋本達也 2012 「九州南部」『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学2

平部嶺南 1976 『日向地誌』（復刻版）

本村豪章 1981 「古墳時代の基礎研究稿—資料(1)」『東京国立博物館紀要』16

柳沢一男 1995 「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第9号

柳沢一男 2000 「古墳時代日向の王と生目古墳群」『浮かび上がる宮崎平野の巨大古墳』生目古墳群シンポジウム'99【報告書】

柳澤一男 2019 「古墳時代日向と宮崎市周辺の古墳」『生目古墳群とみやざきの古墳群』

図出典

図1・図2 国土地理院電子地形図25000をもとに作成

図3 荻田2004a 第1図より作成

図4 宮崎県埋蔵文化財センター2020 第53図をもとに作成

図5 宮崎県1997 図9-1より抜粋

図6 加藤・和田2010 第2図・第3図より作成